

実績を誇る透析医療に新たな支援システムを構築 いち早く高齢者医療・介護・住まいを複合展開

医療法人生寿会
—— 愛知県名古屋市中区



医療法人生寿会（理事長：亀井克典氏）は、1955年創立の医療法人刑部病院を86年に3人の医師が継承して発足した。かわな病院を本院に、愛知県で6番目に老人保健施設を開設するなど先進的な事業を展開してきた。現在は名古屋市中に3ブロック、さらに日進市、清須市、岡崎市、愛知郡東郷町と愛知県内7ブロックに一般病院、リハビリテーション病院、介護老人保健施設、医療介護複合施設など24施設を運営する。昨年3月に開設した医療介護複合施設「アズーリの丘ごきそ」は、同一の建屋内に透析クリニック、介護老人保健施設、介護付有料老人ホームを併設。透析クリニックと介護付有料老人ホームが同一建屋内に併設されるのは東海地区で初の取り組みだという。生寿会は、今後、緩和ケア病棟と数ヶ所のサービス付き高齢者向け住宅（サ高住）の開設も計画し、事業領域を拡大していく方針だ。

透析センター中心の多部門展開に 緩和ケア部門の開設で機能強化

かわな病院は民間病院には珍しく、創立以来、理事長と院長は非同族・非世襲で継承されている。「この経営スタイルを取ったのは3人の創立者の考えです。オーナー理事長のカリスマ性という要素



生寿会理事長・かわな病院院長 亀井克典氏

はありませんが、民主的な経営をめざしています」。そう自負するのは、生寿会理事長でかわな病院院長の亀井克典氏である。亀井氏は旭中央病院、諏訪中央病院、白浜はまゆう病院院長などを経て2004年にかわな病院副院長、08年に院長に就任した。「当法人の強みは透析、リハビリテーション、在宅医療、介護施設、高齢者住宅などいろいろなジャンルのサービスを複数のブロックで展開していることにあります。特定の領域に特化しない複合的な事業形態なので、変化に対応しやすいのです」（亀井氏）。

多部門のなかで収益の柱を担っているのは、透析部門、在宅部門、リハビリテ

かわな病院は「病院づくりの基本目標」に「小さくてもきらりと光る機能と存在感をもった病院」掲げる。伝統の透析医療では生寿会全体で約670人の透析患者さんを治療している。同院の隣にある老人保健施設ヴィラかわな（定員36人）は1989年、愛知県内で6番目の老健として開設された。



かわな病院副院長
石田 治氏

シオン部門の3部門。本院のかわな病院は、名古屋大学医学部附属

病院、名古屋市立大学病院、名古屋第二赤十字病院に囲まれた立地に一般病床53床で運営されている。副院長の石田治氏は「三つの大病院に囲まれ、53床という制約のなかで、どのように地歩を固めていくかがテーマです」と問題意識を示すが、その取り組みが、26施設を展開する「複合的な事業形態」なのである。

かわな病院がめざす機能は、地域密着・小規模多機能型在宅療養支援病院、質の高い専門分野をもった病院である。そのなかでも透析医療は約30年前に透析センターを開設し、生寿会全体で約670人の患者さんをケアするなど、同院の中心となっている。透析センターも兼ねる石田氏は「当院の収益の柱でもあり、長い歴史のもとに地域の患者さんから信頼をいただいています」と述べる。透析センターの機能は今後も強化していく方針で、かわ

な病院の増改築計画にあわせて透析センターの新機器導入も検討中である。

しかし透析医療を充実させても、自宅からの通院が困難になってくる患者さんや、高齢者世帯や独居世帯などで退院後の在宅療養ができない患者さんも、少なくない。そのサポートとして、生寿会は介護付有料老人ホームなどを運営し、高住の開設も計画しているのだ。

訪問診療の対象は約270人で、その3分の2が施設型の住居に住んでいる。

新たな取り組みとして期待されるのが「緩和ケア・在宅療養支援センター」の開設である。現在の53床から10床前後を移行させ、緩和ケア病棟の増設も計画している。「人口の割に名古屋市内に緩和ケア病棟は少ない。採算性を確保しながら地域に頼られる病棟を検討しています」（亀井氏）。すでに、多職種で構成された緩和ケア委員会が月1回定例会議を開き、委員会の主要メンバーで緩和ケアサポートチームを組成して、週1回のカンファレンスと病室訪問を行なっている。亀井氏は「在宅緩和ケア療養支援をメインにする方針です。緩和ケア病棟と在宅療養支援連携診療所である当法人のきくぞの内科・在宅クリニックを連携させて、都市型の小規模緩和ケア病棟のモデルをつくっていかねばと思っています」

と構想を述べる。

生寿会かわなブロックでは、かわな病院、かわな透析センター、かわなデイケアセンター、かわな居宅介護支援事業所、老人保健施設ヴィラかわなショートステイ、かわな訪問看護ステーション、ヘルパーステーションかわな、訪問診療・訪問リハビリテーションなどで「在宅ケア総合支援システム」を運営している。そこに緩和ケアを加えて、競争力をいちだんと強化していく。



生寿会法人事務局長
三田 明外氏



かわな病院事務局長
白井 映芳氏

「株式会社」の参入、報酬の引き下げなどがあり得ると予測されるなかで、医療の質を保証して、他との差別化を図ることが重要と考えています。生寿会法人事務局長の三田明外氏はそう方針を示した上で、現在進めている主な経営改革について3点を挙げた。①医療、介護、住まいの連携強化。②病棟機能検討、強化。③リハビリテーション機能強化。事務局長の白井映芳氏は「医療と介護を多岐にわたって展開して、1人の患者さんを退院後も最期まで看られるという強みをどう生かすかが、経営のポイント

です」と語る。

**看護師の就労環境の整備で
産休明けの復帰率は90%超**



かわな病院看護部長
三浦 真弓氏

生寿会のもうひとつの特徴に、看護師の就労環境整備が挙げられる。

法人職員数は約800人。そのうち看護師が約400人を占めるが、定着状況は良好で、離職率は年間4.5%と全国平均をかなり下回る。10年以上勤務する看護師は20人以上で、看護部長の三浦真弓氏は86年に入職した。産休明けの復帰率も高く、90%以上が復帰している。

高い定着を支えている就労環境の特徴は、育児のサポートだ。夜勤の回数など一定の条件をクリアすれば、保育所の費用の全額を法人が負担している。夜間料金は全額負担である。有給休暇の取得も配慮して、「できるだけ希望にそえる様に取り計らっています」と三浦氏。



かわな病院在宅部門統括マネージャー
平野 玲子氏

さらに介護職に対しては、夜勤手当や住宅手当の支給など看護師と同等に処遇している。「介護職にとっても働きやすい職場なので、介護



「透析医療を提供する病院」である五条川リハビリテーション病院は160床。診療科目は、内科、リハビリテーション科、腎臓内科（人工透析）、血管外科。院内の総合リハビリテーションセンターでは、回復期リハを提供している。今年12月には新しい病棟と通所リハビリセンター（100名）が竣工する。

職の定着も良く、ほとんど辞めません」（かわな病院在宅部門統括マネージャー・平野玲子氏）。

看護師の確保にも相当なコストを投じている。准看護師や高校卒業し入職した職員などが看護学校に入学する場合、資格取得後も生寿会に勤務することを条件に、学費を全額支給しているのだ。「貸与ではなく奨学金を免除する形としている。これは珍しいのではないのでしょうか」（白井氏）。

こうした諸制度にくわえて、就労環境の整備で三浦氏が注力しているのは、看護師のメンタルサポートである。「生寿会の施設は5つの地域に点在しているため、各施設の看護師に、本院に残されるのではないかという不安が生じかねません。私はできるだけ各施設を訪問して看護師と会議をもっているほか、電話も頻繁に入れてコミュニケーションをとっています」。一方で、三浦氏は病棟の師長も兼務する激務をこなしているが、「師長を兼務したほうが現場を把握できてよいのです」とさわやかな笑顔を見せた。

通院困難な透析患者さんを受け入れる透析センターを併設する病院

五条川リハビリテーション病院は03年、桜の名所である五条川のほとりに開設された。回復期リハ病棟、医療保険型療養病棟、一般病棟で構成され、病床数はそれぞれ55床、60床、45床の計160床。「透析センターを併設する病院であることが特徴」（三田氏）で、血液透析室には36人を収容でき、一般病棟には通院が困難な透析患者さんやリハに必要な透析患者さんが入院している。424㎡の総合リハビリテーションセンターではチームアプローチで回復期リハを提供しているほか、退院後には外来・訪問・通所リハと切れ目のない維持期リハを提供している。



五条川リハビリテーション病院
主任理学療法士
佐久間泰彦氏

同院は理学療法士20人、作業療法士8人、言語聴覚士4人を配置。入職11年目の主任理学療法士、佐久間泰彦氏は患者さんとのコミュニケーションギャップの回避を重視している。「リハの内容と時間について、患者さんには患者さんの思いやニーズがあるので、説明しきること、は簡単ではありません。病院側の提供内容と時間と食い違いが生じないよう

に、わかりやすく、ていねいに説明しています」。院内の部門は回復期リハ病棟専従部門、医療保険専従部門、介護保険兼務部門（通所リハビリ・訪問リハビリ）に分かれているため、技術職は職種ごとのミーティングだけでなく、毎月1回前後のサイクルで症例検討会と報告会を開いて情報を共有。外部の勉強会や学会にも積極的に参加しているという。



五条川リハビリテーション病院
看護部長
佐々木優子氏

コミュニケーション重視については、看護部長の佐々木優子氏も同様の見解を示す。同院は全職種を対象に年2回の新入職員研修で接遇を教育し、独自に作成した接遇マニュアルも配布している。「患者さんは職員の声のトーン、表情、話しかけるタイミングをよくご覧になっています。また、患者さんは見てもらっているという立場から、言いたいことがあっても言いにくいのです。当院では、ささいな愚痴や不満でも、耳にしたらすぐに病棟や担当者にフィードバックして、即座に解決しています」。同院に勤務する看護師は約80人。佐々木氏は、既婚者が家庭と両立できるように本人の意向や病院の体制を加味して、勤務時間の調整、補完体制の

構築を図っている。「長期の勤務を望んでいる看護師が多いので、両立できるようにしっかりと話し合っています」。

看護師のモチベーション対策も、佐々木氏の任務だ。佐々木によると、画一的な方法ではなく、本人の性格に合わせた課題の指示が、長い目で見る有効な方法だという。また同院では、院長の島野泰暢氏の発案で地域のマラソン大会に職員が出場したり、昨年は4つのサークル活動を発足させたりしているが、こうした試みは職員同士のコミュニケーションを円滑にしているようだ。佐々木氏も「患者さんの情報を話しやすくなりましたし、お互いに仕事を頼みやすくなりました。おのずと看護師たちも仕事が楽しくなって、モチベーションが上がりました」と成果を評価している。

同院は新しい病棟の着工に入り、今年12月に竣工の予定だ。

最先端の透析医療技術を導入医療介護複合型施設の強み

昨年3月に開設された医療介護複合施設「アズーリの丘ごきそ」は地上8階建て、延床面積は4,772㎡。1階が事務局、2階が「ごきそ腎クリニック」、3～5階が介護老人保健施設「ごきそ杜」、6～8階が介護付有料老人ホーム「メロウごきそ」というフロ

メロウでぎそのエントランスはギャラリーのような内装である。ごきそ腎クリニック院長の宮崎高志氏がプロデュース。オーストラリア製のペイントを購入して、職員たちが手作業でシドニー市のNSW美術館の内装と同じ色に塗り上げた。入居者さんたちが集うメロウでぎその食堂兼機能訓練室は8階に設置され、名古屋市内を一望に見渡せる。ごきそ腎クリニックの透析室はLED照明、輻射パネルによる空調で快適な透析環境を実現させた。

称には患者さんと利用者さんへの深い思いがこめられている。アズーリは空の青を意味し、イタリア代表のユニフォームカラーで知られる。メロウの意味は大人の円熟である。高貴で希望にあふれる施設名は、ごきそ腎クリニック院長の宮崎高志氏が命名した。

ごきその杜は個室18室、多床室8室で、入所定員48人。ショートステイと通所リハも提供し、通所リハの定員は1日20人。メロウでぎそは1人部屋43室、入所定員43人。最上階にある一般浴室からは名古屋市内を一望できるロケーションだ。利用料金は入居金380万円の一時金方式で月額18万1500円、月払い方式では月額



ごきそ腎クリニック院長
宮崎高志氏

ア構成だ。施設の名称は生

寿会の他施設と一線を画しているが、名

22万6,150円に設定。専従の理学療法士を配置している。

宮崎氏は施設の特徴をこう説明する。「通院が困難な透析患者さんの増加への対応として、生寿会は老健を2施設運営していますが、この施設も、通院が困難な透析患者さんの受け皿として開設しました。ごきそ腎クリニックとの連携だけでなく、夜間にメロウでぎその入居者さんの体調に異変が生じていても、ごきその杜に看護師が常駐しているので緊急対応が可能であるなど、複合施設の強みを生かして運営しています」

ごきそ腎クリニックは透析ベッド50床を完備して、最先端の設備とシステムを導入した。主な導入技術はコンソールの全自動化、透析支援システムと電子カルテの連動、輻射パネル設置による空調環境の整備などである。コンソールの全自動化により、従来



医療法人生寿会

◆Information

〒466-0807
名古屋市昭和区山花町50番地
TEL:052-761-3225
URL:<http://www.seijukai.or.jp/>

■かわなブロック

- かわな病院 ○かわなデイケアセンター
- 老人保健施設ヴィラかわな ○かわな訪問看護ステーション
- ヘルパーステーションかわな ○かわな居宅介護支援事業所
- きくぞの内科・在宅クリニック ○ごきそ腎クリニック
- 介護老人保健施設ごきその杜
- 介護付有料老人ホーム メロウでぎそ

■新栄ブロック

- 新栄クリニック ○新栄デイケアセンター
- 新栄居宅介護支援事業所

■栄ブロック

- 中メンタルクリニック

■日進ブロック

- 日進老人保健施設 ○日進居宅介護支援事業所
- 日進クリニック

■東郷ブロック

- 東郷春木クリニック ○東郷春木デイケアセンター

■はるひブロック

- 五条川リハビリテーション病院
- 五条川通所リハビリセンター ○五条川居宅介護支援事業所

■岡崎ブロック

- 岡崎北クリニック

の手動で行う血液透析に比べ作業効率が高圧的に向上し、生じた余剰の時間は重介護の透析患者さんの看護・介護にまわらせるだけでなく、透析治療に必要なスタッフの人数も削減可能となった。すでに成果は出ているが、今後、クリニックの患者数が増えるに従って顕著な数字が表れてくる見通しだという。透析支援システムと電子カルテの連動は「透析治療の領域では新しい取り組み」（宮崎氏）で、透析支援システムで作成された透析レポート、診療情報などが自動的に電子カルテに転送され、透析治療に関わるレセプト業務が大幅に短縮されると同時に、生寿会の他施設と患者情報が共有できる。

一方、輻射パネルは天井の空調機に設置され、透析患者さんにとって不快な要素である風を感じなくさせ、さらに湿度もコントロールする。「当クリニックには感染予防のための1床を個室にしていますが、湿度の調整は空気感染の予防に効果があります」と宮崎氏。生寿会の伝統を培ってきた透析医療は、新たな発展段階に入ったのである。

アズーリの丘でぎそを取材に訪問したのは午後3時過ぎだった。メロウでぎその食堂兼機能訓練室は冬のやわらかな陽に照らされ、壁には、入居者さんが製作した切り絵の数々が飾られていた。「なの花」「秋」「四つ葉のクローバー」「水ばしろう」と題された作品のどれもが、メロウという言葉にふさわしい完成度である。切り絵の前では、15人の入居者さんが、ケアスタッフの指揮に合わせて「荒城の月」「花」「われは海の子」を心をこめて懸命に合唱していた。

（文／小野貴史・撮影／片山千永子）